

50516

教科書文庫

5
8/0
33-1986
01304 49614

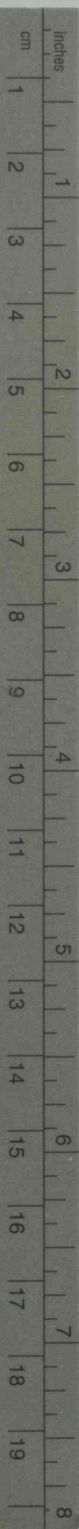
1986

Kodak Gray Scale

G Y M

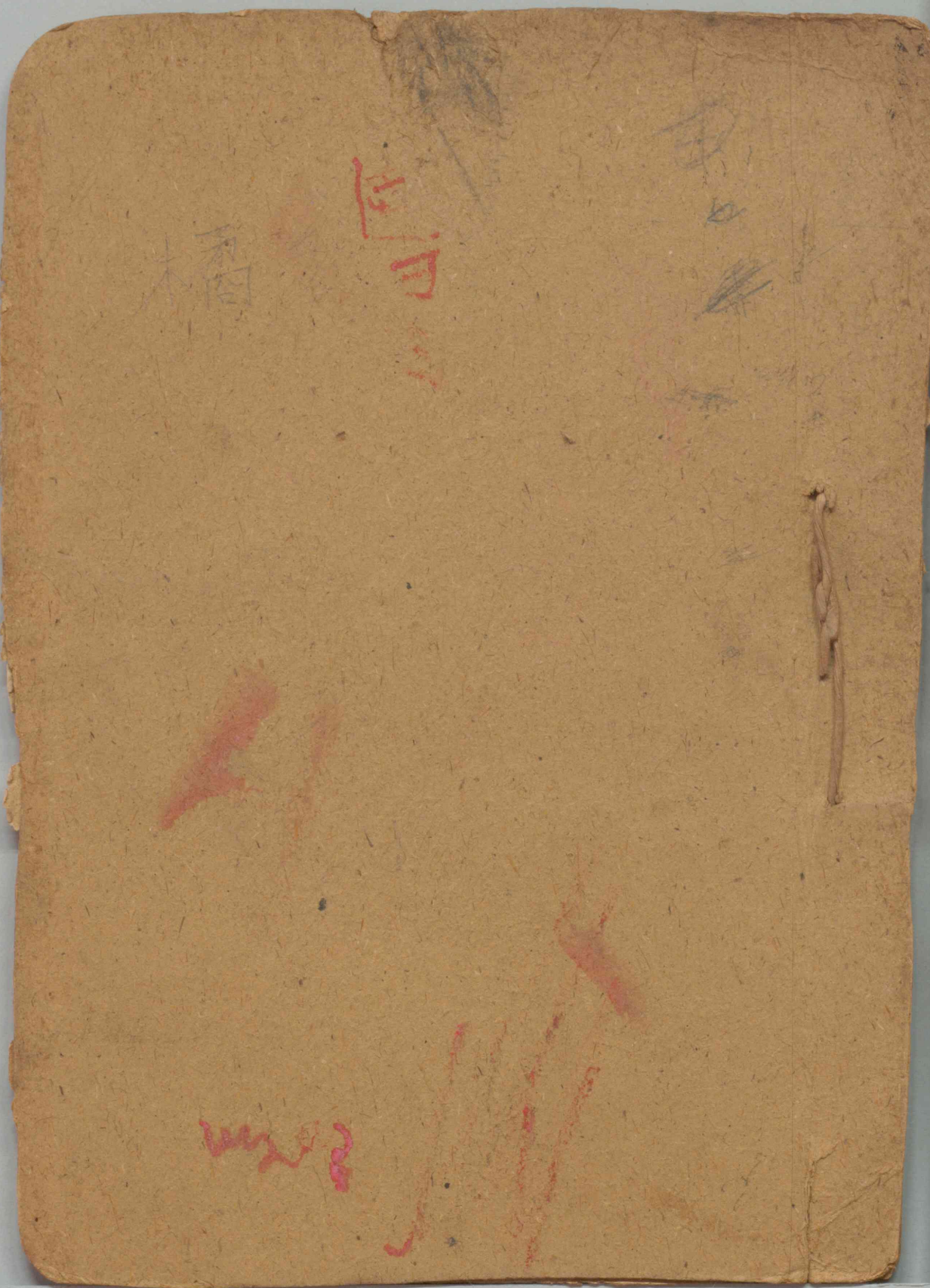
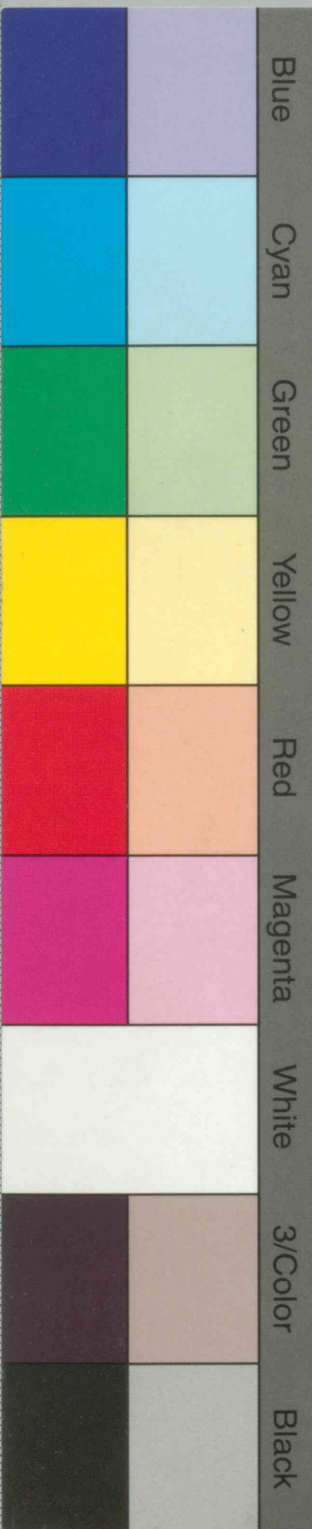
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



中央図書館

弟橘媛相模
止總御櫛

初等科國語 五

第五學年前期用

文部省

広島大学図書

0130449614



目録

一	ことばと文字	一
二	海の幸	二
三	かんこ鳥	四
四	炭焼小屋	七
五	ぼくの子馬	八
六	星の話	十
七	遠泳	十二
八	海底を行く	十四

九	秋のおとづれ	十五
十	武士のおもかげ

一 ことばと文字

私たちが、うれしいなと感じたり、えらいなと感じたり、何かすばらしいことを思いついた時などには、そのことを、おとうさんや、おかあさんや、先生や、お友だちに早く知らせたいと思ひます。

そんな時、

「おとうさん、ぼく、みんなで海へ行つて、ほんたうに愉快でした。」

「おかあさん、あの人は、えらいことをしたものです
ね。」

「先生、この間から、いろいろ考へてゐたのですが、とうとうこんなものを作りました。」

「本田くん、おとうさんといつしよに山のぼりをして、ほんたうにおもしろかつたよ。」
といつて、自分の氣持を傳へます。

このやうに、話しかける相手が目の前にゐる時は、ことばを口に出して、思つてゐることを傳へますが、離れてゐて直接話ができないやうな時には、手紙や文に書いて知らせます。かうして話しかけると、話しかけられた人たちも喜んで返事をしたり、いろいろなことを話したりしてくれまます。それは皆、おたがひに話したり、書いたりすることは、文字がよくわかるからです。もし、私たちの話すことばや、書く文字が、まったくわからない外国人であつたら、いくら話してみても、どんなりつばな手紙を書いてみても、決して心持が通じ合ふやうなことはありません。日本人である私たちは、いつもこのやうに、わが國のことばと文字のおかけをかうむつてゐるのです。

自分の思つてゐることを、話したり書いたりして、すつかり相手にわかつてもらつた時ほど、うれしいことばありません。また、いろいろなお話を靜かに聞き、書かれたものをくり返し讀んで、ことがらや心持がよくわか

つた時は、同じやうに喜ばしいものです。このやうに、ことばと文字は、私たちの心を楽しくしてくれれます。

私たちが、心の中で考へたり感じたりしてゐることを、ことばで話してみると、その考へや感じが、心の中で思つてゐた時よりも、はつきりして來ます。更に、ことばで話したことを文字で書き表しますと、今まで氣づかなかつた考への不足や、感じ方の淺さがはつきりわかつて、自分の考へや感じを、いつそよくはしくし、深くして行くことができます。よく、

「わかつてゐるから、話さなくてもいいよ。」

といふ人がありますが、そんな人は、まだまだことばや文字のありがたさを知らない人です。わかつてゐると思つたことでも、話したり書いたりして、始めてほんたうにはつきりするのです。

ことばと文字は、いはば心の中を寫し出す鏡であります。ただ、ことばは、思つたことを聲でいひ表すのですから、それは聞いてゐる人の心にだけ残ります。それを読む人々が、心から感動するやうに、眞心を正しいことばで話せば、聞く人たちは、喜んでいつまでもその話に耳を傾けます。

私たちは、文字を正しくきれいに書き、りつばな**ことば**で話すことを忘れてはなりません。さうすることが、昔から傳はつてゐるだいな私たちの國語を、ますますりつばにみがいに行くことになるのです。

二 海 の 幸

沖の方は、白くもやでかすんで、見通しがきかない。日の出前の海は、油でも流したやうに静かである。

ばさつばさつと、波が足もとで軽く音をたててゐる。あたりはまだほの暗く、明けきらない港の朝の風は、頬をこちよくなでて通る。

「ポー。」と、力強い汽笛が、突然この静かな港の空気をゆり動かす。その音が、港を兩手でだきかかへるやうに

引きかへ、文字に書き表したものは、どこへでも傳はり、いつまでも残りますから、それを讀むすべての人たちに、場所が違つてゐても、時代がへだたつてゐても、ちやんと心持を傳へることが出来ます。

文字で書き表す場合には、書いたものを何べんも讀み返して、消したり書き足したりして、自分の考へを、できるだけわかりやすく書き表すことができます。しかし、ことばで話す時には、一々ことばを深く考へたり、いひまはしを工夫したりするひまがありません。それで、とかくことばがおろそかになりがちです。それでは困りますから、いつも話すことばに注意して、文字で書くのと同じやうな心掛けを持つことが大切であります。

いくら美しい文字で文を書いて、うそいつはりの心持を書いたのでは、だれも感心して讀まないやうに、どんなにかざつたことばで話しても、眞心がこもらなければ、少しも聞く人々を感心させません。これと反對に、りつばな心持が正しいことばで書かれてあれば、その文取り圍んでゐる裏の山々にこだましながら、長く尾を引いて消えて行く。

左手の山の頂が、銀のやうに白く光り始めると、どす黒かつた海面が、にぶい光線を反射する。

折から、「バンバン」と、白い煙の輪を吐きながら、乳色のもやを破つて、漁船が眞直に近寄つて來る。これを合圖に、今まで眠つてゐた港の船が、急に目をさまし始める。

海面から立ちのぼつてゐた白いもやが、薄れて行つて、山の頂に横たはる雲が、黄にくれなむにかがやき渡ると、はるかな海の上をおほうてゐたもやも消えてなくなり、太平洋のかなたから押し寄せて來るみどりの波が、きらきらと光りだす。

帆柱に旗を立てた漁船が、港へはいつて來たのをきつかけに、二隻・三隻と續いて港へはいつて來る。母親に子どもがすがりつくやうに、今はいつて來たばかりの漁船をめぐけて、ぎいぎいと櫓の音もすがすがしく、たな

さんの小舟が近づいて行く。漁船のかたはらに、小舟が
びつたり寄りそふと、

「えんさらはい、えんさらはい。」

と掛聲にぎやかに、日にやけた漁夫たちが、遠くの海か
ら取つて来た数々の海の幸を、漁船から小さな舟に移
す。まるまると肥えたまぐろ、細長いかじきまぐろ、大
きなさめ——その白い腹が朝の太陽に光り、ひれが力強
くびんと左右に張つてゐる。このまぐろや、さめをのせ
た小舟は、大急ぎで岸の魚市場をめざしてこぎ歸つて行
く。

魚市場の廣いたたきの上を、鉢巻をした若者が、大き
な魚をてんびん棒につるしたり、手押車にのせたりし
て、威勢よく右へ左へ運んで行く。見る見るまぐろもさ
めも、次から次へ行儀よく並べられる。

大きな魚にまじつて、たぐさんのかつをが置かれ、つ
いさつきまでびちびちとはねてゐたやうな、六七十セン
チもある鯛が、つやつやした櫻色のはだに、むらさきの
ねりに變つて沖から押し寄せるところになると、あれほど
活気に満ちて生きもののやうに活動してゐた魚市場も、
ひっそりと静まり返つて、またあすの朝を待つのであ
る。

ちやうどそのころ、港のあちらこちらにもやひしてゐ
る漁船からは、朝げの煙が波の上に影を落しながら、ゆ
つくりと立ちのぼる。

三 かんこ鳥

朝日、いまあらはれて、

ああ、はるけくもこの峯に
光さし來ぬ。

薄きみどり、こきみどり、

山々のひだ縞なして、

見る目うるはし。

星をきらめかしてゐる。その間にまじつて、帯のやうな
たち魚が、いくつもいくつも横たはつてゐるのは、めづ
らしい見ものである。

四角な箱の中には、近くの海で取れたあぢやさばが、
青光のする新鮮な色を見せ、まるいをけの中には、いか
が折り重なつて、今にもちゆつと鹽水を吹き出しさうで
ある。この魚の行列の間を、市場の人たちと魚問屋の若
者たちが、いそがしさうに右往左往してゐる。

荷作り場では、まぐろやさめの腹をさいて、氷を入れ
て送り出す者や、木箱にぎつしり氷といつしよにつめて
荷作りする者や、たいへんないそがしさである。新鮮を
たつとぶ魚の取引きをする魚市場の朝は、見るからにき
びきびとして、威勢がよい。「ブツブツ」とけたたまし
い警笛の音をあとに残して、荷作りされた魚の箱を山の
やうに積んだ貨物自動車が出で行くのは、そ
れから數分ののちである。

太陽があかあかと四方の山々を照らし、波が静かなう

川の流れか、さらさらと

はるかなる麓のわたり

かすかに響き、

いづくともなく霧わきて、

風のまにまに谷間より

ただよひのぼる。

かつこう、かつこう、かんこ鳥、

こだまのごと、ゆめのごと、

かつこう、かつこう。

四 炭焼小屋

青々と茂つたみどりの梢に、煙がなびいてゐる。炭焼
がまから立ちのぼる煙である。

源作ぢいさんは、その煙のやうすをじつと見つめた。黄色な煙の中に、白い煙がまじつてゐる。どうもをかしい。煙の色もへんだが、煙の出るやうすに活気がない。かまが病氣をしてゐるな——と、ぢいさんは思つた。

源作ぢいさんは、かまのそばにすわつて、たき口から中をのぞいて火のかげんを見た。眞赤に焼けた木から、めらめらとほのほが立ちのぼつてゐる。壁にくり抜かれたいくつかの小さな穴から、ほのほが隣りのかまの中へ吸ひ込まれて行く。そのかまには、炭に焼く丸太がぎつしりとつめ込まれてゐるのだ。ぢいさんがのぞいた、あのかまから火氣を送つて、このかまの中の丸太をむし焼きにする仕掛なのだ。

源作ぢいさんは、もえさかるほのほの色をじつと見た。それから、おもむろに立ちあがつて、さしわたし二メートルもある、土で固めた圓形のかまの上へそつと手を置いた。かつとした火氣が手のひらを打つ。源作ぢいさんは、かまがいらいらしてゐるなと感じた。どつかりおやと思つた。木のやにがうんとこびりついて、煙の出口をふさいでゐる。これだ、これが病氣のもとだと、源作ぢいさんの心は急に明かるくなつた。

三

炭焼がまの裏の山道には、丸太を並べた木馬道が、曲りくねつて山の奥の方へ續いてゐる。

その形の形をした木馬に、木を山のやうに積んで、源作ぢいさんが引いておきて来る。右へ曲り、左へ折れて、かまの近くでびたりと止つた。

汗をふきふき、ぢいさんは小屋へはいつて、のこぎりを持ち出した。腰には、毛皮で作つた小さなざぶとんのやうな腰皮をさげてゐる。腰皮の上に腰をおろし、切つて来たばかりの木を、一メートルばかりの長さこそろへて、樂しさうにひき始めた。

一本一本の丸太を、あの炭焼がまへ入れて、今度こそは、土できの炭に焼いてみようと思へながら、ぢいさんは一心に木をひいてゐる。

と、また、かまの前にすわつて、もくもくと立ちのぼる煙を見つめながら、黄色な煙が、薄むらさき色に變つて行くのを心に念じた。

二

二三日たつてから、かまの口を開いた源作ぢいさんは、眞黒に焼けた炭を外へ取り出した。

「うまく焼けたかな。」と氣がせく。三十何年炭を焼いてゐても、かまから取り出すまでは、どんなに焼けたかが氣がかりである。うまく焼けた時は、とびあがるやうにうれしい。この調子で次も焼かうと思ふ。失敗した時はひどく氣持が悪い。この次には、何とかしてうまく焼きたいものだと思ふ。源作ぢいさんは、一メートルばかりの長さに焼けた炭の端を、指の先でこすつてみた。堅くて、うまく焼けてゐない。火のまはりが悪かつたのだ。炭を取り出しながら、源作ぢいさんは、かまの天井や壁をこつこつとたたいてみた。どこも悪くはない。をかしいなと思つて、煙突へ通じる口を、ふと見たとたん、

五 ぼくの子馬

北斗は、ぼくの子馬です。

生まれたのは、去年の春、ちやうど櫻の花の咲くころでした。ぼくが學校から歸ると、父はにこにこしながら「新一、子馬が生まれたよ。」

といひます。それを聞くと、ぼくは、むちゆうになつて馬屋へかけ込みました。見れば、うす暗くしてある馬屋の奥の方で、母馬が、生まれたばかりの子馬をしきりになめてやつてゐました。父もあとから来たので、ぼくが「おとうさん、子馬はをすですか、めすですか。」とたづねますと、父はきも得意さうに、「をすさ。」

といひます。

「ちやあ、今度の子馬は、ぼくに世話をさせてください。」

父は、しばらくだまつてゐましたが、

「うん、おちいさんによく指圖していただいて、ひとつ一生けんめいにやつて見るかな。」

と許してくれました。

ぼくは、うれしくてたまりません。さつそく、そのことを祖父にいひますと、祖父も、

「ほう、おまへが世話をするといふのか。よからう。ひとつやつてごらん。こまかいことはだんだん話してあげようが、第一は、馬をよくかはいがつてやることだ。日本の馬は、氣が荒いとかいはれるさうだが、それも馬が悪いのではない、扱ふ人がいけないから、馬に悪いくせがついてしまふのだ。しんせつにしてやれば、馬ほどすなほで、りこうなものは、めつたにないぞ。」

と教へてくれました。

子馬の名は、北斗ときまりました。一週間ばかりたつて、親子とも馬屋の外へ出しますと、北斗は、おくびやりしました。足もしつかりして來ました。さうして、長い夏も過ぎ秋が來て、野山の草木が枯れるころ、五箇月ぶりであちの馬屋へつれて歸りました。

いよいよ北斗は、乳を離れるやうになりました。からだの手入れをしたり、運動をさせたり、ぼくの仕事がおひおひそがしくなつたのは、そのころからです。しかし、それだけに、かはいさもいつそう深くなつて來ました。

寒い冬の日でも、一日に一度はかならず、北斗をつれて運動に出かけました。ぼくがかげ出せば北斗もかけ出し、ぼくが止れば北斗も止り、追つたり追はれたりしながら、楽しく運動しました。

二歳ごまになつて、北斗もめつきり馬らしくなりました。今年も、六月から放牧に出しましたが、去年と違つて、ぼくが行くと、北斗は、うれしさうにすぐぼくのころへとんで來て、鼻をすりつけます。手のひらに塩をのせてやると、うまさうになめます。ぼくが唱歌を歌ふ

うさうな目つきをして、始めて見る世界をさもめづらしさうに眺めました。大きな犬ぐらゐの大きさで、足は、ばかにひよろ長く見えます。さうして、ともすると母馬にすり寄つては、乳を吸つてばかりゐます。そのかはいやうすは、今でも忘れません。

日がたつにつれて、だんだんぼくになれて來ました。時には乳を飲むのも忘れて、ひよろ長い足で元氣よく、草原の上をはねまはることもありました。

六月になると、母馬につけて、近くの牧場へ放牧にやることになりました。ぼくは、せつかくなれて來た北斗を、手もとからはなすのがいやでしたが、さうしないと、子馬が丈夫にならないのです。で、ぼくは、そのころ學校から歸ると、すぐ牧場へ行つて見ました。牧場には、村のあちこちから、同じやうな子馬がたくさん來てゐて、母馬の草をたべるあとを追ひながら、廣い野原を樂しさに遊びまはつてゐました。

放牧に出してから、北斗のからだはめきめき丈夫になり、北斗はいまでもおとなしく草をたべながら、ぼくのそばで遊んでゐます。

いつのころからか、北斗は、清くんのうちの子馬の青と、大そう仲よしになりました。ぼくのゐない時は、いつでも青と遊んでゐるやうでした。

九月に二歳ごまの市が始るといふので、八月に北斗をうちへつれて歸りました。

北斗は、ほんたうにりこうで、すなほです。教へることとは何でもよく覚えるし、櫛で手入れをしたり、足をあげさせてひづめの裏をさうちしたりしても、じつとおとなしくしてゐます。物に驚いてかけ出さうとするやうな時でも、「ほうほう。」と聲を掛けて、手のひらで軽く首やせなかなでやると、すぐ安心して靜まつてしまひます。この間も祖父がいひました。

「おまへがよくめんだうを見てやつたから、北斗はりつぱな二歳ごまになつた。この村に二歳ごまもたくさんゐるが、北斗ほどみごとなのは見かけないやうだ。幅

もあるし、骨組も丈夫になつた。」

ぼくは、祖父のこのことを聞いて、ほんたうにうれしいと思ひました。

二歳ごまの市が始れば、いよいよ北斗と別れなければなりません。一年半も手しほにかけた北斗といつしよにゐるのも、あといく日もないと思ふと、ぼくは泣きたいほどつらい氣がします。けれども、北斗は、きつとよい人を買ひあげられるに違ひありません。さうして、りつばな乗馬になるでせう。その勇ましいやうすを思ひ浮かべると、ぼくは北斗のたりに喜んでやりたいのです。

六星の話

晴れた夜、空を仰ぐと、たくさん星が、まるで寶石をちりばめたやうに美しくかがやいてゐます。ちよつと見たところでは、ほとんど無数と見えるこれらの星にも、名前や番號があり、位置もきまつてゐるのですが、

七星といひます。

北斗七星が見つかったら、その七つの中の、下の端に當る二つの星に注意しませう。さうして、かりにこの二つの星を結ぶ線を引き、それをなほ右の方へ延してみませう。すると、この二つの星の距離の五倍ばかりのところに、きつと一つの星が見つかります。さつきさがさうとしたのがこれで、北極星といふ星です。

北極星は、いつ見てもほぼ眞北にある星ですから、夜、道に迷つた時など、この星を見つければ、すぐ方角を知ることが出来ます。昔から、航海の目當てとなつてくれたのは、この星です。

ところで、大空の他の星は、時刻によつてかなりあり場所が變つて行きます。今どれか一つの星を、東へさし出た軒端にすれすれに當てて、下からじつと見てゐますと、やがてその星は、軒端にがくれて見えなくなりま

す。つまり星は、西へ西へと移つて行くのです。日や月が東から出て、西へはいるやうに、星もだいたい東から

ただぼんやり見てゐるだけでは、いつたい、どれがどうなのか、さつぱり見當がつかえません。

そこで、まづ眞北へ向かつて立つて見ませう。北の空にもたくさん星がありますが、その中で一つだけじな星があります。地平線からしだいに見あげて、頭の眞上まで行く途中、眞中邊より少し低いところに、かなり大きな星が一つ見えるのが、それです。もつともその高さは、見る場所によつていくぶん違ひます。北の北海道でしたら、ほぼ眞中邊ですが、反對に南の九州あたりでしたら、低くなります。

しかし、かういつただけでは、まだなかなか見當がつかないでせう。さうしたら、どこかその邊の空に、ひしやくのやうな形に連なつた美しい七つの星を、さがすことにしませう。これはすぐ見つかります。七月の中ごろですと、夜九時ごろ、北より少し西へ寄つた方に、ますを下に、少し曲つた柄を上にも、ちやうどひしやくを立てたやうなかつぱうになつてゐます。この七つの星を北斗

出て西へはいるのです。

星の動き方を、もつとくはしく調べて見ますと、北の空では、星が、北極星をほぼ中心に、圓をゑがいて動いてゐるのだといふことがわかります。寫眞機を北極星に向けて、一時間ぐらゐふたをあけておくと、この圓をゑがくやうすがわかるやうに寫眞にうつります。それだけでなく、夜九時に北斗七星を見てその位置を覚え、更に十時、十一時に見ると、この動き方が大てい見當がつかず。さうして、北極星の近くに見える星ほど小さな圓をゑがき、遠くに見える星ほど大きな圓をゑがきます。しかし、このやうに星が動くといふのも、實はわれわれの住んでゐる地球がまはるから、さう見えるだけのことで、今の場合、それを考へに入れないでおきませう。

さて、この北極星や北斗七星を目當てにして、その附近を見ると、いろいろの星の列があります。まづ、北斗七星とその附近にあるいくつかの星を加へて、大熊座と

いひますが、それは昔の人が、それらの星の列に大きな熊の形を考へたからです。また、北極星を柄の端にして、北斗七星とどうやら似た小さなひしやく形に連なるのを、大熊座に對して小熊座といひ、小熊座と北斗七星との間に尾を入れて、小熊座を包むやうにのろのと曲りくねつて連なる十ばかりの星を龍座といひますが、どちらも星があまり大きくありませんから、よく氣をつけて見ないとはつきりしません。それよりも、北極星の右下の方に、椅子の形に連なる五つばかりの星はカシオペヤ座で、俗にいかり星とも、山形星ともいひますが、これははつきりしてゐますから、だれでもすぐ見つけます。さうして、この邊、北から南へかけて、天の川が、夏の夜空に銀の砂子を美しくまき散らしてゐるのが見られます。

七 遠 泳

水が、いつのまにかこいみじり色に變る。彼をより運ると、海岸はたいぶ遠くなつて、人も家も、小さく見える。目の前を、白いかもめが海面とすれすれに飛んで行く。ゆつくりと、自然に兩腕で水を大きくかき、兩足で水をけつて進む。二列に並んだ列を、まだだれも亂す者はない。天氣のよい日、おだやかな海原を航海するやうな楽しさである。この調子なら、わけもなく遠泳ができるうだと、ぼくは喜んだ。一本松を自當てに進んで行く。いつもそばを離れない警備船の上から、先生が、「時々頭を水にひたせ。」と注意される。

遠くに見えた一本松が、だんだん近づいて来る。初めは何も氣がつかなかつたが、一本松がはつきり見えるやうになつたころから、今までからだを浮かしてゐてくれた海が、いくら力を出して泳いでも、なかなか前へ出してくれない。ぼく一人かと思つて前の方を見ると、みんな

「これから遠泳をする。一人残らず目的地に着くやうに。」

先生の激勵のことはをしつかり心にだいて、先頭から順々に海へはいて行つた。

熱い海岸の砂をふんでゐた足の裏に、つめたい海の水が氣持よく感じられる。水の中を歩きながら、顔を洗ひ頭を水でひたす。両手てからだに水を掛けると、ひやつとして氣持がよい。ひざから腰、腰から腹へと、海は一足ごとに深くなつて行く。思ひきつて、からだをすぶりと水の中へつけると、つめたさが身にしみわたる。

先頭から一人一人、順に泳ぎ始めた。いよいよ、ぼくの番になつた。立ち止つて、手を前へ延し足で地面をけると、からだはすいと水の上へ浮かんだ。

風は吹いてゐないが、波が、目の前の水面に、小さな三角の小山をこしらへ、それが顔に當つて、目や鼻へゑんりよなくはいつて来る。うつかりすると、呼吸の調子が、がぶりとからい海水を飲まされる。

先生の聲である。「島の端をまはつてしまへば、あとはらくだ。潮流の激しい一本松の沖あひを、泳ぎ抜けるかどうか成否の分れめだ。」と話された先生のことばが、思ひ出された。潮流に負けてはならないと、ぼくは一かき一けりに力をこめて、潮の流れと戦ふ氣持で泳いだ。さちんとそろつて進んでゐた列が、だんだん亂れて行つた。おくれる者、列からはみ出る者。ぼくは、先頭におくれないやうに、一生けんめいで水をけつた。潮の流れはますます急になるのか、いくら手足に力を入れても、進みはにぶい。一人落ち、三人落ちして、とうとう先頭から三四人めになつた。さうなると、先頭からかけ離れて、間をつめようとしてもなかなか思ふやうにはいかない。並んで泳いでゐた小島くんも、だんだん弱つて來たやうだ。

「小島、廣田、しつかり泳げ。」

初等科國語(五)第五學年前期用 (第二分冊) 【第一分冊第七課「遠泳」ニツヅク】

先生の聲援がありがたかつた。ぼくは、むちゆうで腕と足を動かした。

ふと気がつくとき、小島くんの姿が見えない。何だか一人取り残されたやうな、さびしい氣持になる。その氣持を拂ひのけるやうに、手足に力を入れようとしたが、力がはいらない。水の中で、もがいてゐるやうである。顔を水にひたして、からだを浮かすやうにして泳いだ。一本松を見たが、まだかなり遠いところで手招きをしてゐるやうだ。手足が、石のやうにこはばつて来る。先頭からは、どんどんおくれれて行く。もう、だめだ。警備船へあがらうか。

「廣田、おくれたつてかまはない。ゆつくり泳げ。」と、船の上から先生が叫ばれた。ぼくは、自分の弱い心持が恥づかしくなつた。おくれたつて、ほかの人がやめたつて、ぼくだけは、最後までどうしても泳がう——そ

昭和二十一年三月七日 翻刻印刷
昭和二十一年三月廿五日 翻刻發行
(昭和二十一年三月七日文部省告示)

初等科國語五 第五學年前期用(第二分冊)
◎ 定價 金五拾錢

著作權所有 著作兼 發行者 文 部 省

翻刻發行 兼印刷者 東京書籍株式會社
代表者 井上源之丞

印刷所 東京部王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

發行所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

Approved by Ministry of Education
(Date Mar. 7, 1946.)

れからは、何も考へないで、まるで機械のやうに手足を動かした。

一本松が、右手の海岸のがけの上に、大きく立つてゐるのが見えた。もう一息だと力を出した時、ふしぎにからだは、すすいと前の方へ軽く進んで行つた。がけの下をぐるつとまはると、今まで見えなかつた島の裏側の海岸が見えて来た。青々とした木が、鏡のやうに靜かな海面に影を投げかけてゐる。その向かふに、眞一文字に白い線を引いたやうな砂濱が、目にしみるやうに寫つた。

「廣田よくやつた。もう大丈夫だ。潮の流れもいいし。そら、あそこに見えるだらう、あの砂濱が、到着點だ。」

ぼくは、全身の力を腕と足とにこめて、遠い砂濱をめかけて、元氣よく泳いで行つた。

八 海底を行く

目の前に、

關門海峡はさざ波をたたへ、

車窓から何百の船が見える。

「おかあさん、

あの海峡をくぐるのね。」

汽車はたちまちトンネルにはいつた、

ざあつとすべつて行く車輪の響き。

「おかあさん、

今、海の底を走つてゐるのね。」

本州と九州の握手だ、

日本最初の海底トンネルだ。

「おかあさん、

まるでおとぎ話のやうね。」

だいたいな物資や、郵便物や、

私たちを一気に運んでくれる。

「ありがたいやありませんか。

命がけてはつたおかげですよ。」

ふり返ると、

關門海峡はさざ波をたたへ、

いそがしさうに船が動いてゐる。

「おかあさん、

あの下を通つて来たのね。」

九 秋のおとづね

秋は虫の聲から始る。

晝間は、まだ暑い暑いの歎聲が口をついて出て来る。

眞夏の暑さはだれも覺悟をしてゐるが、八月もなかばを越せば、どこかに秋らしいものが見えてもよささうなものである。それなのに、寒暖計は三十度を越えたがる。暑さは、もうたくさんだといひたくなる。するとある日の午後、裏山の森で、「つくつくぼうし、つくつくぼうし。」の聲を聞いた。

暑い日がやつと暮れても、よひの間は家の中がむつとして、柱も壁も、さはるとどうやら熱氣を吐いてゐる。二階へあがつてみても、さして涼しい風はなささうである。ただ晴れた夜空に星がきらきらとさえ、銀河がさやかに中天にかかつてゐる。その時ふと耳にするものは、前の草原で鳴く虫の聲である。それがはたして何虫であるか、はつきりはしないが、かなりたくさんの聲であることを感じる。夜がふけると、思ひなしか屋根瓦が少ししめつて来る。

夜の燈火をしたつて来る虫は、蛾や、こがね虫など、どれもこれもただうるさいだけであるのに、どこからか

かすかに羽音がして障子に軽くはさと止つた虫が、やがて「すいつちよ、すいつちよ。」をくり返す。このくらゐあいきやうのある氣のきいた虫は、めつたにないものだ。さうして、それが、しきりに「秋だ、秋だ。」と鳴きたてるやうに思はれる。

もう何といつても秋である。よし晝間はどんなに暑からうとも、日光はかすかに黄色味を帯びて、壁やへいの強い反射がいくぶんやはらいで見える。梢吹く風が、思ひ出したやうに、ざわざわと音をたてる。背戸のみぞ端に、秋海棠がはいらしい薄赤の花をつける。畠のにらの花に、頭でつかちないちもじせせりが飛びちがふ。何よりも、たんぼに早稲の穂が出そろつて白く波打つのが秋らしく見渡される。

やがて二百十日が来て、農家はただ風ばかりを心配する。夜は、そろそろこほろぎが家の中へはいて、床の下や壁の中で聲高く鳴きたてる。

十 武士のおもかげ

かりまたの矢

義家、ある日安倍の宗任らをつれて、廣き野を過ぎ行
きしに、きつね一匹走り出でたり。義家、背に負ひたる
うつぼより、かりまたの矢を抜きて弓につがへ、きつね
を追ひかけしが、殺さんもふびんと思ひて、左右の耳の
間をねらひてひようと射る。矢は、あやまたず頭上をす
れすれにかすめて、きつねの前なる土に立ち、きつねは、
その矢につき當りて倒れたり。

宗任、馬よりおりてきつねを引きあげながら、
「矢は當らぬに、死にて候。」
と申せば、義家、

「おどろきて死にたるなり。捨ておかば、ほどなく生き
返るべし。」
といふ。

「すべてを張りかへんは、はるかにたやすく候。まだら
になりて見苦しかるべし。」
と重ねていへば、

「尼も、のちには新しく張りかへんとは思へど、すべて
物は破れたるところをつくらへば、しばらくは用をな
すものぞと、若き人に見ならはせんとして、かくするな
り。」

といひけり。

馬ぞろへ

山内一豊、織田家に仕へし初め、東國第一の名馬なり
として、安土に引き來て商なふものあり。信長の家臣らこ
れを見るに、まことにならびなき馬なり。されど價あま
りに高くして、買ふもの一人もなく、空しく引き歸らん
とす。

一豊もこの馬ほしく思へど、求むることいかにもかな
ふべからず。家に歸りて、

宗任、すなはち矢を取りてさし出せば、義家、背を向
けてうつばにささせけり。宗任はもと賊軍の頭にて、近
ごろ降りし者なれば、他の家來どもこのさまを見て、
「危きことかな。するどき矢をささしめたまふことよ。
もし、宗任に悪しき心もあらば。」
とて、手に汗をにぎりけり。

障子張り

相模守時頼の母を、松下禪尼といへり。時頼を招くこ
とありけるに、すすけたる障子の破れを、禪尼、てづか
ら小刀にて切りまはしつづ張りゐたり。城介義景、こ
れを見て、

「その障子をこなたへたまはりて、なにがしに張らせ候
はん。さやうのことに、なれたるものにて候。」
と申しければ、禪尼、

「その男、尼が細工にはよもまさり候はじ。」
とて、なほ一間づつ張りゐたり。義景、

「世の中に、身貧しきほどくちをしきことはなし。一
豊、仕への初めなり。かかる名馬に乗りて見參に入れ
たらんには、主君の御感にもあづかるべきものを。」
とひとりこといひしに、妻つくづくと聞きて、
「その馬の價は、いかばかりにや。」
と問ふ。

「黄金十兩とこそいひつれ。」

「さほどに思ひたまはば、その馬求めたまへ。價をば、
みづからまゐらすべし。」

とて、鏡の箱の底より黄金十兩を取り出す。

一豊、大きにおどろきて、

「この年ごろ身貧しく、苦しきのみ多かりしに、その黄
金ありとも知らせたまはず。されば、今この馬、ゆめ
にも求め得べしとは思はざりき。」
と喜び、またうらむ。妻、

「のたまふところ、ことわりにこそ。されどこれは、わ
らはこの家にまゐりし時、この鏡の下に父の入れたま

ひて、ゆめゆめ、世のつねのことに用ふべからず。汝の夫の一大事あらん時にまゐらせよとて、たまひき。されば、家貧しくして苦しむなどは、世のつねの事なり。まことにや、都にて御馬ぞろへあるべしなど聞ゆ。君は仕への初めなり。良き馬にめして、主君の御感にあづかりたまへ。」

一豊「すなはちその馬を求めたり。」

やがて馬ぞろへの日とはなれり。いづれおとらぬ馬多く集りたる中に、一きは目だちてたくましきを信長うち見て、

「あつばれ、名馬。たれの馬ぞ。」

と問へば、家臣答へて、

「これは東國第一の名馬とて、商人の引きてまゐりしを、一豊が求め得たるものに候。」

と申す。信長、

「一豊は仕へて日なほ浅く、家も貧しからんに、よくも

はたして荒波おのづから静まりて、御船は進むことを待たり。

七日ののち、後の御櫓ただよひて海べに寄りぬ。尊、

これををさめて、後のみはかを作らせたまふ。

東國の賊を平げて、尊、西へ歸りたまふ時、相模の足柄山を越えたまふ。はるかに海を望みたまひて、

「あづまはや。」

とのたまひぬ。これよりのち、このわたりを廣く「あづま」といふとぞ。

十二 稲むらの火

「これは、ただごとでない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出て来た。今の地震は、別に激しいといふほどのものではなかつた。しかし、長い、ゆつたりとしたゆれ方と、うなるやうな地鳴りとは、年取つた五兵衛に、今まで経験したことのない、

かかる名馬を求めたるぞ。見あげたる志。」と、しばし感じてやまざりけり。

十一 弟 橘 媛

日本武尊、相模の國より御船にて上總へ渡りたまふ。

にはかに風起り波たちさわぎて、御船進まず。従者みな、船底におそれ伏したり。

尊に従ひたまへる后、弟橘媛「これ海神のたたりなるべし。かくては御命も危からん。」と思ひたまひて、尊に申したまふやう、

「われ、皇子に代りて海に入り、海神の心をなだめん。」

皇子は勅命を果して、めでたくかへりごと申させたまへ。

と申したまひて、すがだたみ八重、皮だたみ八重、きぬだたみ八重を波の上に敷きて、その上におりたまへり。

い、無氣味なものであつた。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配さうに下の村を見おろした。村では、豊年を祝ふよひ祭の支度に心を取られて、さつきの地震には、一向気がつかないものやうである。

村から海へ移した五兵衛の目は、たちまちそこに吸ひつけられてしまつた。風とは反對に、波が沖へ沖へと動いて、見る見る海岸には、廣い砂原や、黒い岩底が現れて来た。

「大變だ。津波がやつて来るに違ひない。」と、五兵衛は思つた。このままにしておいたら、四百の命が、村もろとも一のみにやられてしまふ。もう一刻もぐづぐづしてはゐられない。

「よし。」

と叫んで、家へかけ込んだ五兵衛は、大きなたいまつを持つてとび出して来た。そこには、取り入れるばかりになつてゐるたくさんのお米が積んである。

「もつたないが、これで村中の命が救へるのだ。」

と、五兵衛は、いきなりその稲むらの一つに火を移した。風にあふられて、火の手がぱつとあがつた。一つまた一つ、五兵衛はむちゆうで走つた。かうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまふと、たいまつを捨てた。まるで失神したやうに、かれはそこに突つ立つたまま、沖の方を眺めてゐた。

日はすでに没して、あたりがだんだん薄暗くなつて来た。稲むらの火は天をこがした。山寺ではこの火を見て早鐘をつき出した。

「火事だ。莊屋さんの家だ。」

と、村の若い者は、急いで山手へかけ出した。續いて、老人も、女も、子どもも若者のあとを追ふやうにかけ出した。

高臺から見おろしてゐる五兵衛の目には、それが蟻の歩みのやうにもどかしく思はれた。やつと二十人ほどの若者が、かけあがつて来た。かれらは、すぐ火を消しに

た。人々は、われを忘れて後へとびのいた。雲のやうに山手へ突進して来た水煙のほかは、一時何物も見えなかつた。

人々は、自分らの村の上を荒れくるつて通る、白い、恐しい海を見た。二度三度、村の上を、海は進みまた退いた。

高臺ではしばらく何の話し聲もなかつた。一同は、波にゑぐり取られてあとかたもなくなつた村をただあきれ見おろしてゐた。

稲むらの火は風にあふられてまたもえあがり、夕やみに包まれたあたりを明かるくした。始めてわれにかへつた村人は、この火によつて救はれたのだと氣がつくと、ただだまつて、五兵衛の前にひざまづいてしまつた。

十三月の世界

望遠鏡で見た月

かからうとする。五兵衛は、大聲にいつた。

「うつちやつておけ——大變だ。村中の人に来てもらふんだ。」

村中の人は、おひおひ集つて来た。五兵衛は、あとからあとからのぼつて来る老幼男女を、一人一人數へた。集つて来た人々は、もえてゐる稲むらと五兵衛の顔を、代る代る見くらべた。

その時、五兵衛は、力いつぱいの聲で叫んだ。

「見ろ。やつて来たぞ。」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。その線は、見る見る太くなつた。廣くなつた。非常な速さで押し寄せて来た。

「津波だ。」

と、だれかが叫んだ。海水が、絶壁のやうに目の前にせまつたと思ふと、山がのしかかつて来たやうな重さ、百雷の一時に落ちたやうなとどろきとで、陸にぶつかつ

「きみ、今夜うちへ来ないか。」

學校の門を出ると、正男くんがぼくにかういつた。

「どうして。」

「にぃさんが天體望遠鏡を作つたんだ。」

「ほう。」

「月がすばらしいよ。よかつたら見に来たまへ。」

夕方、まだ明かるい空に、半月が光り始めた。おかあさんにさういつて、夕飯がすむと、すぐ出かけた。

行つてみると、正男くんのうちでは、もう縁先に望遠鏡をすゑつけて、にぃさんと正男くんが、代る代る觀測をしてゐる。長さ一メートルばかりの望遠鏡が、三脚の上につてゐる。

「りつばな望遠鏡ですわね。」

と、ぼくがにぃさんにいふと、正男くんは、

「これににぃさんのお手製なんだ。見たまへ、筒はポール紙だらう。三脚は、やつとときのふできあがつた。ぼくも、すゑぶん手傳つたよ。」

「レンズは。」

「買ったのさ。レンズは、だいぶ上等なんだ。」

正男くんは、さも自分で買ったやうな口振りで見よ。に
いさんは、初めからにこにこしながらだまつてゐた。

「ああ、きみものぞいてごらん。」

と、正男くんにはれて、ぼくは望遠鏡に目を近寄せ
た。

望遠鏡の圓い視野に、月がくつきりと浮き出して見え
る。それは肉眼で見るとすつかり感じが違つて、今に
露でもしたたりさうな、なまなましい、あざやかな美し
さである。

「きれいだなあ。」

ぼくが思はず叫ぶと、正男くんが、

「きれいだらう。」

と、あひづちを打つやうにいふ。だが、よく見ると、月
の表面は決してなめらかではない。一面にざらざらした
やうな感じである。殊に、半月のかけた部分に近く、峰

點のやうなものがあるでせう。あれは海といはれる部分
ですが、月には水が一しづくもありませんから、海とい
ふより、平原といつた方がよいかも知れません。たぶ
ん、昔、このたぐいさんな火山からふき出した熔岩が、流
れて固まつたものでせう。

月には水がないといひましたが、水ばかりか空気もな
いのです。したがつて、雲や、雨や、あらしや、さうい
つた、この地球上に見られる氣象現象は、一つもありま
せん。月は、いつも晴天なのです。この望遠鏡で見ても
わかるやうに、月のどこ一つくもつたところがないの
が、その證據です。しかも、空気も水もないとすると、
地球上のやうに、太陽から来る光や熱を調節するものが
ないから、月の世界では、晝はこげつくやうな暑さ、夜
はその反対に、ひどい寒さであらうと思はれます。

「まだおもしろいことがあります。かりに、私たちが月
の世界へ行つたとすると、そのけしきはどんなものでせ
う。今もいふやうに、光を調節するものがないから、太

の巢を思はせるやうなでこばこが、目立つて見える。

「月の顔には、すむぶんあばたがあるね。」

と、ぼくがいつたので、にいさんも正男くんも、笑つた。

それから、三人代る代るのぞきながら、にいさんか
らおもしろい説明を聞いた。

にいさんの説明

あのあばたのやうに見えるのは、大部分が火山で、穴
は噴火口です。こんな小さな望遠鏡でさへ、はつきり見
えるのですから、噴火口は、非常に大きなものだといふ
ことが考へられます。いちばん大きなのは、直径が二百
キロもあるといはれてゐます。かうした火山は、どれも
これもけはしくて、低いのも三百メートル、高いのに
なると八千メートル——富士山の二倍以上もあるのがあ
ります。もちろん、月は地球と違つて、とつくの昔、す
つかり冷えてしまつた天體ですから、火山といつても、
みんな死火山ですがね。

それから、よく見なさい。月の中に薄黒い、大きな斑
陽に照らされた部分は、目が痛いほど光つて見えるでせ
うが、陰になる部分は、きつと眞黒に見えるに違ひな
い。ごつごつした火山が、到るところにそびえて、それ
が眞黒な大空に突つ立つてゐるとしたら、どんなに恐し
いけしきでせう。もちろん、草も木もありませんよ。そ
の代り、一つうらやましいと思ふのは、月から見た地球
の美觀です。地球の直径は、月の約四倍ありますから、
夜、月から地球を見るとすると、われわれが常に見る月
の四倍ぐらゐな地球が、天にかかつて見えるわけです。
かういふやうに、月の世界は、いはばまつたく恐しい、
死の世界ですが、それでゐて、昔から月ほどやさしい、
平和な氣持を興へてくれるものはありません。その青白
い、しみじみと親しめる光が、われわれに大きな慰めを
興へるからです。殊に日本では、昔から月と文學が、ま
つたく離れられないものになつてゐます。ごらんなさ
い、歌でも、俳句でも、詩でも、月に關するものがどん
なに多いか。月の世界に都があつて、そこで天人が舞つ

てゐるなどは、實に美しい想像ですね。今日私たちは、それが死の世界であると知つても、やはり月がなかつたらさびしい。峯の月、大海原の月、椰子の木かげの月、さういふものがないとしたら、ほとんど生きがひがないと思ふでせう。月は、永久に人間の心の友であり、慰めであります。

十四 柿の色

かま場より出でし喜三右衛門は、しばし縁先にやすらひぬ。

日は、やや西に傾けり。仰げば庭前の柿の梢は、大空に墨繪をるがき、すすなりの赤き實、夕日を浴びて、さながら珊瑚珠のかがやくに似たり。この美しさに、しばし見とれたる喜三右衛門は、ふと何思ひけん、「おお、それよ。」とつぶやきて、直ちにまたかま場へ引き返しぬ。

その夜、喜三右衛門は、かまのかたはらを離れざりき。鶏の聲を聞きては、はや心も心にあらず。かまの周囲を、ぐるぐるとめぐり歩きぬ。

夜は、やうやく明けはなれたり。胸ををどらせつつ、やをらかまを開かんとすれば、今しも朝日、はなやかにさし出でて、かま場を照らせり。

一つまた一つ、血走る眼に見つめつつ、かまより皿を取り出しわたるかれは、やがて、「おお。」と力ある聲に叫びて、立ちあがりぬ。

ああ、多年の苦心は、つひに報いられたり。かれは、一枚の皿を両手にささげて、しばしかま場にこをどりしぬ。

喜三右衛門は、やがて名を柿右衛門と改めたり。

柿右衛門は、今より三百餘年前、肥前の有田に出でし陶工なり。かれは、その後いよいよ研究を重ね、工夫を積み、つひに柿右衛門風と呼はるる、精巧なる陶器を製作するにいたれり。その作品は、ひとりわが國にもて

その日より、喜三右衛門は、赤色の焼きつけに熱中し始めたり。されど、めざす色はたやすく現るべくもあらず、いたづらに焼きてはくだけき、くだけては焼き、はてはただばう然として、歎息するばかりなり。

苦心は、そのみにあざりき。研究に費す金はしだいにかさみ、しかも工夫に心をうばはれては、おのづから家業もおろそかならざるを得ず。やがて、その日の生計も立ちがたく、弟子たちこの師を見かぎり去りて、手助けをする者一人もなし。人はこの様を見て、たはけとあざけり、氣違ひとののしる。されど、喜三右衛門は、動かざること山のごとく、一念ただ夕日に映ゆる柿の色を求めて止まざりき。

かくて數年は過ぎたり。ある日の夕べ、あわただしくかま場より走り出でたるかれは、

「たき木、たき木。」

と叫びつつ、手當りしだいに物を運びて、かまの火にこごとく投じたり。

はやさるるのみならず、遠く海外にも傳はりて、名工のほまれはなほだ高し。

十五 初冬二題

ゆす

今年も、隣のゆすが黄ばんだ。

かんとさえた冬空、

太陽が、まぶしく仰がれる。

かさこそと、

竹竿であの木の梢をつついてゐた

隣のをぢさんは、今ゐない。

からたちの垣根越しに、ふとほほ笑んで、

「あげようか。」と、投げてくれた

をぢさんは、よい人だつた。

あの時、ざくつとおや指を皮に突き立てたら、

しゆつと、しぶきがほとばしつて、爪を黄いろく染めたものだつた。

なつかしいゆすのかをり、わたしは、しつと梢を仰ぎ見た、今は轉任して、遠くへ行つてしまつたをちさんを思ひながら。

朝 飯

新づけの白菜、
何といふみづみづしさであらう。
かめば、さくさくと齒切れよく、朝の氣分を新たにする。

父も、母も、兄も、妹も、だまつて箸を動かしてゐる。そろつて健康に働く家族の、楽しい朝飯だと思へば、

へあれば、織機のことを調べ續けてゐたのである。

「いよいよ、あれは氣違ひだ。」
村中にこんなうはさがひろがると、父も、だまつてはゐなかつた。

「おまへは大工のせがれだ。ほかのことを考へないで、みつしり仕事をやつてくれ。」
とさとしたが、佐吉のもえるやうな研究熱は、どうすることもできなかつた。父は、とうとう佐吉をよその大工の家にあづけてしまつた。

この間に立つて、佐吉を勵ましたり、慰めたりしてくれたのは、母であつた。佐吉は、「今にきつと成功してみせます。しばらくお許しください。」と、心の中で深く両親にわびた。

佐吉の考へは、かうであつた。人間の衣食住といふものは、みんな大切なものであるから、布を織る仕事も、決してゆるがせにしてはおかれない。今のやうな仕方では、みんながきつと困る時が来るに違ひない。それに

あたたかい御飯の湯氣が、幸福に、私たちの顔を打つ。

明けて行く朝、

窓ガラス越しに、林が黒い。

からからと、どこかで荷車の音。

白い御飯から、

あたたかいみそ汁から、

ほかほかと、立ちのぼる湯氣を見つめながら、

私は、さくさくと白菜をかむ。

十六 豊田佐吉

「機ばかりいじつてゐて、をかしなやつだ。男のくせに。」

豊田佐吉は、村の人々から、かういつてあざけられた。

佐吉は、父の大工の仕事を助けて働いてゐたが、ひまは、どうしても、織機をもつともつと進歩させなければならぬといふのである。

佐吉が、最初目をつけたのは、布を織る時、たて糸の間を縫つて行くよこ糸であつた。よこ糸は杼によつて、右から左、左から右へと往復するのであるが、これを人の手によらず、機械の力で動かすやうに工夫したかつた。機械で動かせば、もつと早く往復するやうな仕組みになるだらう。更に進んでは、ひとりで、布がすすんで織られて行くやうにもなるであらう。次から次へと、佐吉の考へは高まつて行つたが、わづか小學校を出ただけのかれには、ややもすれば、手のとどきさうもない空想になりがちであつた。

たまたま、そのころ東京に博覽會が開かれた。佐吉は上京して、目をかがやかしながら、その機械館へ毎日通つた。銀色に光つたたくさんの機械は、まるで生き物のやうに動いてゐた。かれは、その精巧な機械を見て感心するとともに、何ともいへない膺身のせまい思ひがし

た。機械は、どれ一つとして、わが日本製のものでなかつたからである。

「こんなことではないのか。日本の将来をどうするのだ。」
佐吉は、もうじつとしてゐられなくなつた。

せめて自分のめざしてゐる織機を仕あげて、いつかは、外國を見返してやらうと固く決心した。

それからは、ほとんど晝も夜もなかつた。設計圖を引いては、組み立てた。組み立てては、それを動かしてみた。だが、思ふやうに動くものは、なかなか生まれ来てなかつた。佐吉は、一軒の納屋に閉ぢこもつて、一心に考へぬき、これならといふ一臺の織機を作りあげたが、これもまんまと失敗であつた。世間からは、ますます笑はれて、だれ一人相手にさへしなくなる。貧しさは、ひしひしと身にせまつて来る。しかし、佐吉は、「このくらゐのことで弱るものか。」と、新しい勇氣をふるつて立ちあがつた。

鐵材を使うことができなかつたために、すべて木材に

初等科國語(五)第五學年前期用 (第三分冊) 【第二分冊第十六課「豊田佐吉」ニツミク】

よつて、こまかなところまで作り直して行つた。今までの失敗の原因を、みんな取り除いて、面目を一新した設計圖ができあがつた。さつそく、その組み立てに取りかかり、苦心の末、やつと思ひ通りの織機ができあがつた。驗してみると、はたしてよく動いた。

この織機を、村の人々の前で、試運轉する日がやつて来た。黒山のやうに集つた人たちは、布をみごとに織つて行くふしぎな機械に目を見張つた。

「よくやつた。えらいものだ。」

みんなは、かういつてほめたたへた。この日、佐吉の織機を操つて、りつぱに布を織つてみせた人こそ、佐吉の母であつた。明治二十三年、佐吉が二十四歳の時のことである。

翌年 特許を得た。豊田式人力織機は、盛んに國內に使用されるやうになつた。しかも、かれはこれに満足せ

昭和二十一年四月十六日 翻刻印刷
昭和二十一年五月十日 翻刻發行
(昭和二十一年四月十六日 文部省特許)

初等科國語(五) 第五學年前期用(第三分冊)

定價 金參拾五錢

著作權所有 發行者 文 部 省

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地

翻刻發行 東京書籍株式會社

兼印刷者 代表者 井 上 源 之 丞

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地

印刷所 東京書籍株式會社

發行所 東京書籍株式會社

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地

發行所 東京書籍株式會社

Approved by Ministry of Education (Date Apr. 16, 1946.)

ず、すぐ動力機械の製造にとりかかつた。人の力から、機械の力に移すといふ、多年の夢を實現しようといふのである。そこで、更に七年間の工夫が續けられ、みごと佐吉の自動織機が完成された。これが、日本における自動織機の始祖である。

この自動織機の出現によつて、日本は、あつぱれ綿布工業國として、世界に乗り出すやうになつた。

何千臺といふ自動織機が勢ぞろひをして、いつせいに活動し、すばらしい速さで織り出す光景は、見るからに壯觀である。

十七 頂、一つ

雪残る頂一つ國ざかひ
島々に灯をともしけり春の海
赤い椿白い椿と落ちにけり
もらひ來る茶わんの中の金魚かな
たたかれて晝の蚊を吐く木魚かな
山門をぎいととぎすや秋の暮

子規 子規
鳴梧 碧梧
漱石 子規

十八 漢字の音と訓

私たちは、毎日、本や、新聞や、雑誌を読んでゐます。時には綴り方や、手紙を書きます。かうして讀んだり書いたりする文章は、漢字とかなで書き表されます。

「生まれる」「生える」「生きる」「生る」のやうに、「生」を「うまれる」「はえる」「いきる」「なる」といふいろいろな読みます。これは、「うまれる」「はえる」「いきる」「なる」といつたわが國のことを、漢字の「生」に當てて讀んだもので、それらの讀み方が、自然「生」の字の訓となつたのです。このやうに、訓にも、音のやうに二つ以上ある場合があります。

音と訓を持つた漢字を、二字以上組み合わせせて、ことばが書き表された場合には、どの漢字もすべて音で讀むか、または訓で讀むのが普通です。「先生」「遠足」「教科書」「萬年筆」などは、音ばかりで讀む例で、「父親」「笑顔」「物干竿」などは、訓ばかりで讀む場合です。ところで、「山川」「父母」のやうに、「さんせん」「ふば」、あるひは、「やまかは」「ちちはは」と、音でも訓でも讀める場合があります。また、ことばによつては、「重箱」「記念日」のやうに、上を音、下を訓で讀んだり、「手本」「道順」のやうに、上を訓、下を音で

かなは、だいたいきまつた音で讀みますが、漢字にはいろいろな讀み方があります。例へば、「國民學校」の「國」「民」といふ漢字は、「こく」「みん」と讀むほかに、「くに」「たみ」とも讀みます。「こく」「みん」といふ讀み方は、漢字本來の發音で、これを漢字の音といひます。「くに」「たみ」は、漢字の訓と呼ばれるものですが、これこそわが國の昔からのことばで、それを漢字に當てて讀んだものです。

「國」「民」「年」「島」など、そのほか大部分の漢字は一つの音で讀みますが、「大木」「木目」の「木」は、「ぼく」とも、「もく」とも讀みます。また「銀行」「行列」の「行」は、「かう」「ぎやう」などと讀み、「宮殿」「龍宮」の「宮」は「きゆう」「ぐう」などいろいろな音で讀みます。これは、もともと支那各地でいろいろな音が行はれてゐたのが、自然わが國へもはいつて、それぞれの讀みならはしとなつたのです。

「國」「民」「靴」「杖」などの訓は、一つですが、讀んだりする場合も、まれにはあります。

漢字には、このやうに音と訓があり、中には、音訓にいろいろな種類があつて、意味の違いや、文のおもしろみを出してゐるのです。漢字を音で讀むか訓で讀むか、どの音で讀み、どの訓で讀むかは、すべて、讀みならはしによつてきまるのです。殊に、人の姓名や、地名などには、おのおの特別な讀み方があります。

私たちが、漢字を讀む時には、このやうにいろいろな漢字の音と訓とに注意して、その場合に應じた、正しい讀み方をするやうにしなければなりません。

十九 塗り物の話

「工場を見せていただきましたのですが、」「さあ、どうぞこちらへおいでください。」主人に案内された塗り物の工場は、薄暗い土蔵の中である。障子をもれて來る窓際の明かりで、職人が、白木の

盆のところでころへ、黒い、やはらかな膏薬のやうなものを、細い竹べらでつめてゐる。

「何を つめてゐるのですか。」

「こくそといふものですよ。米の粉と、おがくづとを、漆でねり合はせたもので、木地に、すき間や、きずをなくすために、かうしてつめてゐるのです。」

左手で、盆をくるくるまはしながら、熟練した手早さで、職人は、一つ一つのすき間へ、こくそをつめて行く。

次の部屋へはいると、こくそをつめた白木の盆が、うづ高く積んである。そのかげで、職人の手が動いてゐる。その手は、盆を一枚一枚、はけでさび色に塗つて行く。

「これはさび漆といふものです。さび土と漆と、ませ合はせて作ったものです。さび土は、その土地特有のもので、これがなかなか塗り物には大切なものです。」

職人は、話しながらも、仕事の手はちつともゆるめない。

急な階段をのぼつて二階へ行くと、そこにも、だまつて塗り物を塗つてゐる人たちがゐた。

といひながら、主人は戸を開いた。上下二段にわかれた戸だので、中にはわくが仕掛けてある。

「このわくへ、塗つた物をはさみます。わくは心棒で支へ、時計仕掛で静かに回轉させながら、漆がまんべんなく行き渡るやうにして乾かします。この時計仕掛が發明されない前は、夜中でも起きて、心棒を手でまはさなければならなかつたのです。」

なるほど、室の横側には、重い分銅のついた仕掛があつて、時計が時を刻むのと同じやうに、目に見えないくらゐゆつくりした動きで、わくが回轉してゐる。

「漆はよく天氣を知つてゐて、雨が晴かば、その乾き具合ですぐわかるほどです。漆が乾く時には水分を吸収しますが、乾いてしまつたら水分を受けつけません。乾かさうと思へば、半日ぐらゐでも乾きますが、早く乾かし過ぎると、あとでちぢんで、しわができません、干割れがしたりします。だから、夏でも冬でも、できるだけ温度と湿度に變りのない土蔵が選ばれ、更

この人たちは、下塗りのできた盆の内側へ、黒い漆を塗つて行く。さうして、時々、くじやくの羽で穂先を作つた細い筆で、漆にまじつたごみを取つてゐる。

「下塗りは下の部屋でしますが、中塗りと上塗りは、二階の方がいいのです。塗り物には、ほこりが禁物ですから。」

主人の話は、中塗りのことになる。

「下塗りができあがると、その上へ、このやうに中塗りをします。盆のやうに簡単なものでも、表と裏と同時に塗ることはできません。まづ、このやうに内側を塗つて、それを乾かしてから外側を塗るのです。なかなか手数のかかる仕事です。」

さういへば、そばに積まれた中塗りの盆は、内側ばかりが塗つてあつて、外側はまださび色のままである。

「このまま自然に乾かすのですか。」

「いや、さうたやすくはいきません。この室の中をこらんなさい。」

に、室の中で乾かす必要があるのです。」

主人の話に感心しながら、上塗りの部屋へはいる。

下塗りと中塗りができた上へ、上漆をかけて最後の仕上げをする仕方は、中塗りと同様で、ここでも同じやうな工程がくり返されてゐる。

「これで、一通り工場の御案内は終わりました。これから、製品陳列室で、できあがつた品物を見ていただきたいと思ひます。」

さて、みなさん。私は陳列室へはいつて、いろいろな塗り物の並んでゐるのを見ましたが、みなさんの周囲には、どんな塗り物があるか氣をつけてごらん下さい。さうして、それらが一つ一つ、このやうにしてできあがつたのだといふことを、よく考へてください。

二十 ばらの芽

正岡子規

くれなゐの二尺のびたるばらの芽の針やはらかに春雨の降る

松の葉の葉ごとにむすぶ白露のおきてはこぼれこぼれてはおく

島木赤彦

雪降れば山よりくだる小鳥多し障子のそとにひねもす聞ゆ

若山牧水

土ぼこりうづまき立つや十あまり荷馬車すぎ行く夏草の野路に

伊藤左千夫

汽車の来る重き力の地ひびきに家鳴りとよもす秋の晝すぎ

おとろへし蠅の一つが力なく障子にはひて日はしづかなり

二十一 茶わんの湯

ここに、茶わんが一つあります。中には、熱い湯が、いつばいはいつてをります。ただそれだけでは、何のおもしろみもなく、ふしぎもないやうですが、よく氣をつけて見てみると、だんだんに、いろいろのこまかいことが目につき、さまざまのうたがひが起つて来るはずです。ただ一ぱいのこの湯でも、自然の現象を観察し、研究することの好きな人には、なかなかおもしろい見ものです。

第一に、湯の面からは、白い湯氣がたつてゐます。これは、いふまでもなく、熱い水じよう氣が冷えて、小さなしづくになつたのが、無數に群がつてゐるので、ちやうど、雲やきりと同じやうなものです。この茶わんを、縁側の日なたへ持ち出して、日光を湯氣にあて、向ふ側に黒い布でも置いて、すかして見ると、しづくのつぶの大きいのが、ちらちらと目に見えます。場合により、つぶがあまり大きくない時には、日光にすかして見ると、湯氣の中に、じのやうな、赤や青の色がついてゐます。これは、白い薄雲が月にかつた時に見えるのと、似たやうなものです。この色については、お話することがどつさりありますが、それは、また、いつか別の時にしませう。

すべて、まつたくとう明なガス體のじよう氣が、しづくになる時には、かならず、何か、そのしづくの心になるものがあつて、そのまはりに、じよう氣がこつて、くつつくので、もし、さういふ心がなかつたら、きりは、

たやすくできないといふことが、學者の研究でわかつて來ました。その心になるものは、けんび鏡でも見えないほどの、たいへんにこまかい、ちりのやうなものです。空氣中には、それが、自然にたくさん浮いてゐるので、空中に浮んでゐた雲が、消えてしまつたあとには、今いつた、ちりのやうなものばかりが残つてゐて、飛行機などで横からすかして見ると、ちやうど、けむりがひろがつてゐるやうに、見えるさうです。

茶わんからあがる湯氣をよく見ると、湯が熱いか、ぬるいかが、おほよそわかります。しめきつたへやで、人の動きまはらない時だと、殊によくわかります。熱い湯ですと、湯氣の温度が高くて、まはりの空氣にくらべて、よけいに軽いため、どんどん盛んに立ちのぼります。反對に、湯がぬるいと、勢が弱いわけです。湯の温度を計る寒暖計があるなら、いろいろ自分で驗して見ると、おもしろいでせう。もちろん、これは、まはりの空氣の温度によつても違ひますが、おほよその見當はわかるだ

らうと思ひます。

次に、温度があがる時には、いろいろのうづができません。これが、また、よく見てゐると、なかなかおもしろいものです。線かうのけむりでも、何でも、けむりの出るところからいくらかの高さまでは、まつすぐにあがりますが、それ以上は、けむりがゆらゆらして、いくつものうづになり、それがだんだんにひろがり、入り亂れて、しまひに見えなくなつてしまひます。茶わんの湯氣などの場合だと、もう茶わんのすぐ上から大きなうづができ、それが、かなり早くまはりながら、のぼつて行きます。

これとよく似たうづで、もつと大きなのが、庭の上などにできることがあります。春先などのぼかぼか暖い日には、前日雨でも降つて、土のしめつてゐるところへ日光が當つて、そこから白い湯氣が立つことがよくあります。さういふ時に、よく氣をつけて見てゐてごらん下さい。湯氣は、えんの下やかき根のすき間から、つめたい

きくて、うづの高さも、一里とか二里とかいふのですから、さういふ、いろいろな變つたことが起るのですが、しかし、また見方によつては、茶わんの湯と、かうしたらい雨とは、よほどよく似たものと思つてもさしつかへありません。もつとも、らい雨のでき方は、今いつたやうな場合はかりでなく、だいたい様子の変つたものもあります。だから、どれもこれもみんな、茶わんの湯にくらべるのは無理ですが、ただ、ちよつと見ただけでは、まつたく關係のないやうなことがらが、原理の上からは、おたがひによく似たものに見えるといふ一つの例に、かみなりをあげてみたのです。

湯氣のお話はこのくらゐにして、こんどは湯の方を見ることにしませう。

白い茶わんにはいつてゐる湯は、日陰で見ても、別に變つた様子も何もありませんが、それを日なたへ持ち出して、じかに日光をあて、茶わんの底をよく見てごらん下さい。そこには、妙なゆらゆらした光つた線や、薄暗

風が吹きこむ度に、横になびいては、また、立ちのぼります。さうして、大きなうづができ、それが、ちやうどたつまきのやうなものになつて、地面から何尺もある、高い柱の形になり、たいへんな速さでくわい轉するのを見ることがあるでせう。

茶わんの上や、庭先で起るうづのやうなもので、もつと大仕掛なものがあります。それは、らい雨の時に、空中に起つてゐる大きなうづです。陸地の上のどこかの一地方が、日光のために特別に温められると、そこだけは、地面からじよう發する水じよう氣が、特に多くなります。さういふ地方のそばに、割合につめたい空氣におほはれた地方がありますと、前にいつた地方の、暖い空氣があがつて行くあとへ、入れかはりに、まはりのつめたい空氣が下から吹きこんで来て、大きなうづができます。さうして、ひようが降つたり、かみなりが鳴つたりします。

これは、茶わんの場合にくらべると、仕掛がすつと大い線が、不規則な模様のやうになつて、それが、ゆるやかに動いてゐるのに氣がつくでせう。これは、夜、電燈の光をあてて見ると、もつとよく、あざやかに見えます。夕食のおせんの上でもやれますから、よく見てごらん下さい。それも、お湯がなるべく熱いほど、模様はつきりします。

次に、茶わんのお湯がだんだんに冷えるのは、湯の表面の茶わんのまはりから、熱が逃げるためだと思つていいのです。もし、表面にちやんとふたでもして置けば、冷やされるのは、おもに、まはりの、茶わんにふれた部分だけになります。さうなると、茶わんに接したところでは、湯は冷えて重くなり、下の方へ流れて、底の方へ向つて動きます。その反對に、茶わんのまん中の方では、ぎやくに上の方へのぼつて、表面からは外側に向つて流れます。だいたい、さういふふうなじゆんくわんが起ります。よく理科の書物などにある、ピーカーの底をアルコールランプで熱した時の水の流れと、同じやうなもの

になるわけです。これは、湯の中に浮んでゐる、小さな
糸くづなどの動くのを見てゐても、いくらわかるはず
です。

しかし、茶わんの湯を、ふたもしないで置いた場合に
は、湯は表面からも冷えます。さうして、その冷え方が
どこも同じではないので、ところどころ特別につめたい
むらができます。さういふ部分からは、冷えた水が下へ
おり、そのまはりの割合に熱い表面の水が、そのあとへ
向かつて流れ、それが、おりた水のあとへとどく時分に
は、冷えて、そこからおります。こんなふうにして、湯
の表面には、水のおりてゐるところと、のぼつてゐると
ころとが、方々にできます。したがつて、湯の中までも
熱いところと、割合にぬるいところとが、いろいろに入
り亂れて、できて來ます。これに日光をあてると、熱い
ところと、つめたいところとのさかひで、光が曲るため
に、その光が一樣にならず、むらになつて、茶わんの底
を照らします。そのために、さきについてたやうな模様

ふしぎな模様が何であるかといふことは、まだ、あまり
よくわかつてゐないやうです。しかし、それも、前の温
度のむらと何か関係があることだけは確かだせう。

湯が冷える時にできる、熱い、つめたいむらが、どう
なるかといふことは、ただ、茶わんの時だけの問題では
なく、たとへば、湖水や海の水が、冬になつて、表面か
ら冷えて行く時には、どんな流れが起るかといふやうな
ことにも、關係してきます。さうなると、いろいろの實
用上の問題と、縁がながつて來ます。

地面の空氣が、日光のために温められてできる時のむ
らは、飛行家にとつて、たいへんに危ないものです。突
風といふものがそれです。たとへば、森と島とのさかひ
のやうなところだと、島の方が、森よりも、日光のた
めによけいに温められるので、島では空氣のぼり、森
ではくだつてゐます。それで、島の上から飛んできて、
森の上へかかると、飛行機は、自然と下の方へおしおろ
される傾きがあります。これがあまりに烈しくなると、

見えるのです。

日のあたつたかべや屋根をすかして見ると、ちらちら
したものが見えることがあります。あの「かげろふ」と
いふものも、この茶わんの底の模様と同じやうなもので
す。「かげろふ」が立つのは、かべや屋根が熱せられる
と、それに接した空氣が熱くなつて、ふくれてのぼる、
その時にできる氣流のむらに、光を折り曲げるためなの
です。

このやうな水や空氣のむらを、はつきりと見えるやう
に、工夫することができません。

さういふ方法で、望遠鏡を使つて、空中の高いところ
の空氣のむらを、調べようとしてゐる學者もゐたやうで
す。

次には、熱い茶わんの湯の表面を、日光にすかして見
ると、湯の面に、にじの色のついた、きりのやうなもの
が、一皮かぶさつてをり、それが、ちやうどさけめのや
うに縦横に破れて、そこだけがとう明に見えます。この
危けんになるのです。これと同じやうな氣流のじゆんく
わんが、もつと大仕掛に、陸地と海との間に行はれてを
ります。それは、海陸風と呼ばれてゐるもので、晝間は
海から陸へ、夜は反對に陸から海へ吹きます。少し高い
ところでは、反對の風が吹いてゐます。

これと同じやうなことが、山の傾きと谷との間にあつ
て、山谷風さんくふうと名づけられてゐます。これが、もう一そ
う大仕掛になつて、たとへば、アジヤ大陸と太平洋との間
に起ると、それがいはゆる季節風きせうふう（モンスーン）で、わ
れわれが冬期に受ける北西の風と、夏期の南がかつた風
になるのです。

茶わんの湯のお話は、すればまだいくらでもあります
が、こんどは、これくらゐにしておきませう。



昭和二十一年八月十三日 翻刻印刷
昭和二十一年九月十日 翻刻發行
(昭和二十一年八月十三日文部省検査済)

初等科國語五 第五學年用(第三分冊) 終

定價 金貳拾五錢

著作權所有 發行者 兼 文 部 省

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
翻刻發行 兼印刷者 東京書籍株式會社

代表者 井上源之丞

印刷所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

Approved by Ministry
of Education
(Date Aug. 13, 1946)

發行所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

広島大学図書

0130449614

